

Title	日本の製薬産業におけるオープンイノベーションの発展に関する一考察： 破壊的イノベーションによる研究開発力の向上について
Sub Title	
Author	野呂, 優規美(Noro, Yukimi) 中村, 洋(Nakamura, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2010
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2010年度経営学 第2564号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002010-2564

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

80930840

野呂 優規美

主査

副査 1

副査 2

中村 洋

青井 倫一

浅川 和宏

研究テーマ

日本の製薬産業におけるオープンイノベーションの発展に関する一考察
—破壊的イノベーションによる研究開発力の向上について—

内容の要旨

欧米の製薬企業の研究所は 2007 年以降、5 施設が日本から撤退した。また日本から創出される新規化合物の数が 90 年代初めと比較し激減し、日本の研究開発力の低下が懸念される。90 年代半ば以前日本では生活習慣病をターゲットとして得意の有機合成技術により低分子合成品の新薬が数多く創出された。しかし既存領域は開発し尽くされ、アンメットメディカルニーズやバイオ医薬品など開発が困難で新技術を要する医薬品に新薬開発の対象は移行している。製薬企業にとって後者は技術革新が速くリスクが大きいいため、企業外部からの新薬シーズ及び技術の取り込みが欠かせない。しかし日本の産学連携では、低分子の既存領域に関する持続的イノベーションの取り込みが主であった。破壊的イノベーションであるバイオ医薬品、癌やアルツハイマー等の新薬シーズや技術について欧米ではベンチャーが開拓的役割を担っている。

本研究のテーマは、日本発の新薬シーズを生み出す研究開発力の向上である。製薬企業が破壊的イノベーションを進める上で、新薬シーズや技術を取り込むためのオープンイノベーションを国内で促進することが必要である。本研究では、その促進のための課題を明らかにし、課題克服のための提言を行う。

研究手法として、まず文献調査を行い、現状を把握するため内資及び外資製薬企業、大学関係者等へのインタビューを行い、分析・考察を行った。

日本の製薬企業は 2006 年以降欧米のベンチャーを買収し、破壊的イノベーションを進める上での新薬シーズや技術の取り込みを進めている。一方、日本のベンチャーは、資金・人材などのリソースの不足から、研究初期のシーズを提携に必要な評価可能な段階まで育てることが出来ない。このことが新薬のシーズを創出できない原因となっており、日本の研究の基盤の弱さとなっている。先行する欧米企業では、領域別組織の専門的スモールユニットへの組織改革により、目利

き力、意思決定のスピード、買収後の運営容易さを実現している。対して自前主義の強い日本大手企業における組織変革は緒に就いたばかりである。日本の研究初期のシーズを評価可能な段階まで育成させるために、製薬企業は買収した欧米のベンチャーから既存とは違う研究開発プロセス等を取り込み、新薬シーズの育成の支援に活用する必要がある。

以上の分析から、本研究では日本の製薬企業側へ以下の 2 つの提言を行う ;1) 専門的スモールユニット型の領域別組織への変革を推進する、2) 日本のベンチャー企業に、新薬シーズ育成のための研究開発のノウハウを提供する、又、人材・資金面のリソース不足解消を助ける。

なお、ベンチャー側からのオープンイノベーションの多面的な研究が今後の課題である。